One's Life
（より豊かに生きるためのヒントをお伝えします）

さまざまな経験やそのときどきの想いを
糧に築きあげて昨日より今日、
今日より明日の人生を充実させている、
長谷雅恵さんの生き方を紹介します。

地域が動いていくには、まず人がつながっていかないと！

【Profile】風間浦村出身。下風呂温泉郷「まるほん旅館」の女将として奮闘する傍ら、「下風呂温泉女将の会」会長を務める。「津軽海峡マグロ女子会」のメンバー。2018年、まるほん旅館を会場に「下風呂温泉満喫！下北すっぴん毒だしツアー」が開催された。

父の介護をきっかけに故郷の下風呂へUターン

県内の大学で家政学を学び、卒業後は東京で栄養士として働いていた長谷雅恵さん。女性が多い職場で、能力評価に性別は関係ないと考えながらキャリアを重ねていましたが、男性社員の方が昇進して活躍が目立つこともありました。「それは男性だから当然。仕方がない」という妬みのような感情を持つ同僚の女性たちも多く、徐々に違和感を覚えるようになりました。ちょうどその頃、父親が病に倒れ、介護が必要になりました。「自分の中で優先順位をつけた時に、両親や故郷が上だった」。食べ物がおいしく、空気もおいしく、温泉がある故郷へ帰ることに迷いはありませんでした。

1995年、37歳の時に生まれ育った風間浦村へUターン。「あっ、帰ってきたの？」と声をかけられ、道行く人がみな、知っている人という環境はとても新鮮に感じ心地よかったそうです。実家は下風呂温泉郷で明治20年代から営業を続ける老舗温泉宿「まるほん旅館」。母親の津恵子さんとともにお客様を迎える日々が始まりました。毎年、正月とお盆に帰省した際は旅館の仕事を手伝っていたため、すぐに溶け込めたといいます。

女将の傍ら、商工会や旅館組合の仕事、2012年からは「下風呂温泉女将の会」会長を務めます。ほぼ24時間365日稼働する旅館の仕事は体力勝負で、スタッフ不足のために過酷な日が続くこともあります。宿泊のお客様が優先されますが、予約がない日や、一日のうちどこかに自分のプライベートな時間をつくることで、バランスをとっているのだそうです。

縁を感じた人のつながり

再び下風呂での生活が始まった頃、インターネットで下北地域のことを調べていた長谷さんは、大間町に住む島康子さん（Yプロジェクト(株)代表）の存在を知りました。島さんは、故郷の大間町に、東京から17年ぶりにUターン後、おもしろがる心で地域を元気にする活動をしていました。すぐに島さんとコンタクトを取り、それからは下北地域での交流関係が劇的に広がっていきました。2014年に北海道南部と青森県の女性たちと連携し、「津軽海峡マグロ女子会」の立ち上げにも尽力し、現在は同会の企画イベントに協力しています。長谷さんは、人のやる気に火をつけることも多く、ヒントを与えたり、人と人を結び付けることが得意で、コーディネーター的な役割をしています。

また、いろいろな場所に出向き、いろいろな方の話を聞くことが仕事にも活かされているそうです。平成27年に青森県男女共同参画センターがむつ市で開催した「あおもりウィメンズアカデミー」を受講。受講生同士で地域課題の解決策を議論した経験やその時の学び、人とのつながりも役に立っています。

「地域の中で自分の考えだけになり、愚痴が多くなることもある。うまくいかないことを、誰かのせいにしてしまうことも。立場の違いろいろな人の意見を聞いて、自分から動かないと何も進まないという気持ちを持って、動いています」。

これからの下風呂温泉郷

最近は滞在型のお客様も増えていますが、人口減少や人手不足の影響は下風呂温泉郷にも現れています。「人材を旅館ごとに採用せず、繁忙期と閑散期に合わせ、各旅館や事業所間で柔軟に対応できるようになれば」と長谷さんは言います。また、歴史ある旅館を継承していくために必要なことは何か、経営者として悩みながらも、都会で疲弊した心身を癒してほしいというお客様に対する気持ちはいつも変わりません。今日も笑顔でお客様を出迎えています。

下風呂温泉郷の共同浴場「新湯」と「大湯」は老朽化の影響で、来年、新たな場所に建て替える予定です。「今の場所からなくなるのは寂しくなりますが、新しい場所に移っても、私たち女将が伝えていくことがある」と、下風呂温泉女将の会では、さよならイベントを企画中です。

このほか、温泉客が鉄道アーチ橋メモリアルロード周辺を散策した後に立ち寄れる場所として、まるほん旅館の一角に新しくカフェをオープンする準備を進めています。ここが温泉街の灯りとなって、長谷さんの人柄で多くの人がつながる場所になるに違いありません。

（取材：吉町　友美）